

ウィトゲンシュタインにおける 限界の彼岸

伊 藤 潔 志

はじめに

I 言語と世界

- (1) 言語の限界
- (2) 世界の構造
- (3) 言語と世界

II 事実と価値

- (1) 哲学の問題
- (2) 価値の問題
- (3) 宗教の問題

III 世界の外側

- (1) 信仰と啓示
- (2) 沈黙の宗教

おわりに

はじめに

本稿は、ウィトゲンシュタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein, 1889-

キーワード：宗教，言語，世界，価値，沈黙

1951)¹⁾の哲学を宗教思想として解釈し、その特質を明らかにすることを目的とする。一般に、ウィトゲンシュタインが宗教思想家として理解されることは少ないかもしれない。たしかにウィトゲンシュタインは、宗教・神・信仰といった問題を主題として取り扱うことはなかった。しかし現在は、ウィトゲンシュタイン自身が宗教に深い関心を持っていたことから²⁾、ウィトゲンシュタインの宗教論に関する研究も多くなされている³⁾。また、ウィトゲンシュタインの哲学、とりわけ後期哲学の「言語ゲーム (das Sprachspiel)」、
「生活形式 (die Lebensform)」といった概念が神学に応用されたりもしてい

1) 本稿でウィトゲンシュタインの著作は、次のテキストを使用した。引用にあたっては略号の後に、TBについては頁数を、TLPについては節番号を、DTについては原文の頁番号をそれぞれ示した。

TB: *Tagebücher* 1914-1916., in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band I, Surkamp Verlag GmbH, 1995.

TLP: *Tractatus Logico-Philosophicus.*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band I, Surkamp Verlag GmbH, 1995.

DT: *Ludwig Wittgenstein: Denkbewegungen Tagebücher 1930-1932, 1936-1937.*, Hrsg. von Ilse Somavilla, Haymon Verlag, 1997.

なお、訳出にあたっては、次の訳書を参照した。

奥雅博訳『ウィトゲンシュタイン全集』第1巻、大修館書店、1975年。

野矢茂樹訳『論理哲学論考』岩波文庫、2003年。

イルゼ・ゾマヴィラ編、鬼塚彰夫訳『ウィトゲンシュタイン 哲学宗教日記』講談社、2005年。

2) A・C・グレーリング (岩坂彰訳)『ウィトゲンシュタイン』講談社メチエ、1994年、14頁を参照のこと。

3) 邦語の文献だけでも、春日佑芳『ウィトゲンシュタイン—哲学から宗教へ』ペリかん社、1988年、A・キートリー (星川啓慈訳)『ウィトゲンシュタイン・文法・神』法蔵館、1989年、星川啓慈『宗教者ウィトゲンシュタイン』法蔵館、1990年、ノーマン・マルカム (ピーター・ウィンチ編、黒崎宏訳)『ウィトゲンシュタインと宗教』法政大学出版局、1998年、黒崎宏『ウィトゲンシュタインが見た世界—哲学講義』新曜社、2000年などがある。

る⁴⁾。ウィトゲンシュタイン自身が生涯、宗教に重大な関心を寄せ続けていたことは、草稿や日記の記述から窺い知ることができる。

たとえば、1916年6月11日の草稿⁵⁾には、次のような記述がある。

生 (das Leben) の意義 (der Sinn), すなわち世界 (die Welt) の意義を, 我々は神と呼ぶことができるのである。／そして, 父としての神という比喩をこれに結びつけること。／祈りとは, 世界の意義についての思考 (der Gedanke) である。(TB, S. 167.)

これはウィトゲンシュタインのいわゆる前期哲学の時期にあたるものであるが、後期においても宗教への関心は一貫している。これについては、1993年に発見された1930～32年および1936～37年の日記が大いに参考になる。たとえば、1937年1月27日の日記には、次のような記述がある。

信仰 (das Glauben) は、信じること (das Glauben) から始まるのだ。信じることから始めなければならない。言葉 (die Worte) からは、いかなる信仰も生まれえない。もう十分だ。(DT, S. 151.)

またウィトゲンシュタインは、このような関心からキルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855) の著作を愛読していたらしい⁶⁾。たとえば、

4) こうした立場を「ウィトゲンシュタイン・フィデイズム (Wittgensteinian Fideism)」と呼ぶ。詳しくは、星川啓慈『ウィトゲンシュタインと宗教哲学—言語・宗教・コミットメント』ヨルダン社, 1989年, 星川啓慈『言語ゲームとしての宗教』勁草書房, 1997年を参照のこと。

5) 1914～16年に書かれた草稿・日記は、ウィトゲンシュタインが第一次世界大戦に従軍していた時期に書かれたもので、後の『論考』の基礎となる考察が多く含まれている。

6) 河上正秀「ウィトゲンシュタインのキルケゴールへのまなざし——『倫理→

1937年2月13日の日誌には、次のような記述がある。

良心 (das Gewissen) に苦しめられ、そのため仕事ができない。キルケゴールの著作を読んで、これまでもそうだったが、いっそう不安になった。私は、苦しもうとしない。このことが、私を不安にさせる。(DT, S. 166.)

おそらくウィトゲンシュタインは、キルケゴールから思想的な影響も受けていたのだろう⁷⁾。それは本稿の直接の主題ではないが、ウィトゲンシュタインにとって宗教が大きな関心事であったことは、紛れもない事実である。したがって後述のように、『論理哲学論考 (Tractatus Logico-Philosophicus)』(1921年、以下『論考』と略記する)の最後の有名な言葉「語りえぬものについては、沈黙せねばならない (Wovon man nicht sprechen kann, darüber muß man schweigen)」(TLP, 7)も、そのような文脈で理解しなければならない。ウィトゲンシュタインが宗教について多くを語っていないとしても、間接的に読み取ることはできる。結論を先取りして言うならば、ウィトゲンシュタインの哲学は宗教思想そのものなのである。

周知のように、ウィトゲンシュタインの哲学は、前期と後期とに分けられる。それは、一貫した思想を残しつつも大きな転換であった。したがって、ウィトゲンシュタインの前期哲学と後期哲学とは、共通している部分と大きく変化している部分とがある。本稿では、ウィトゲンシュタインの前期哲学に注目し、ウィトゲンシュタインに一貫している哲学の中に宗教思想を見出し、その特質を明らかにしたい。

→的なもの』をめぐって——」(筑波大学哲学・思想学会『哲学・思想論叢』第17号、1999年1月、71～82頁所収)を参照のこと。

7) cf. Genia Schönbaumsfeld, *A Confusion of the Spheres: Kierkegaard and Wittgenstein on Philosophy and Religion*, Oxford University Press, New York, 2007, pp. 10.

I 言語と世界

ウィトゲンシュタインは、『論考』の序文で、次のように言っている。

本書は、哲学の諸問題を扱っており、そして——私が信じるところでは——それらの問題が我々の言語の論理 (die Logik unserer Sprache) に対する誤解から生じていることを示している。(TLP, Vorwort)

つまりウィトゲンシュタインは、哲学の問題は「言語の論理 (die Sprachlogik)」(TLP, 4.002; 4.003) を正しく理解すれば解決する、と言っているのである (vgl., TLP, 4.003)。これは、ウィトゲンシュタインの前期哲学から後期哲学までを貫くウィトゲンシュタインの哲学の核心であり、確信である。そこで本節では、『論考』におけるウィトゲンシュタインの哲学の要点を、ウィトゲンシュタインの言語観に即して概観したい。

(1) 言語の限界

上掲の引用からは、ウィトゲンシュタインの二つの意図を読み取ることができる。一つは、「哲学の問題を解決する」というウィトゲンシュタインの目的である。そしてもう一つは、そのための方法で、「言語の論理を正しく理解する」ということである。それゆえ『論考』の課題は、言語の論理を正しく理解することがなぜ哲学上の問題を解決することになるのかを論証することにある。

ウィトゲンシュタインによれば、従来の哲学者たちは言語について誤解していた。そして、その誤解から生じた幻の問題 (= 哲学の問題) と格闘してしまっていた。しかし、ウィトゲンシュタインの確信が正しければ、哲学者の本当の任務は言語の本質を解明することである。そして、それがなされれば、これまでの哲学の問題は消え失せることになる。すなわち、問題だと思われていたものが実は問題でなかった、ということが明らかになるのである。

このようにウイトゲンシュタインの哲学とは、哲学の問題に解答を与えることによって問題を解決しようとするものではなく、問題自体を問題にすることによって問題を解消しようとするものである。それは、先述のように、後期哲学まで一貫したウイトゲンシュタインの基本的な立場である。それゆえ鍵は、言語である。『論考』は、言語には隠れた論理構造がある、という前提の上に成り立っている。そして、その論理構造を解明することによって、言語の限界を明らかにしようとしている。

ウイトゲンシュタインにおいて言語の限界は、思考の限界を意味する。これまでの哲学の問題は、言語の限界（＝思考の限界）を超えたところに存する。言語で語りえないものについて語ろうとすること、思考しえないことについて思考しようとする、これがこれまでの哲学の問題の正体だと言うのである。そしてそれが、本稿の冒頭で引用した「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」（TLP, 7）という命題に集約されていくのである。

それでは、哲学の役割とは何か。ウイトゲンシュタインは、次のように言っている。

語りうること以外は、何も語らぬこと。自然科学の命題（der Satz）以外は——それゆえ哲学とは関係のないこと以外は——、何も語らぬこと。そして、誰か形而上学的なことを語ろうとする人がいれば、そのたびにあなたは、その命題のこれこれの記号（das Zeichen）にいかなる意味（die Bedeutung）も与えていない、と指摘する。これが、本来の正しい哲学の方法に他ならない。この方法は、その人を満足させないだろう。——彼は、哲学を教えられている気がしないであろう。——しかしこれこそが、唯一厳格に正しい方法なのである。（TLP, 6.53）

それでは、倫理・宗教・芸術といった価値の問題は、無意味なものになってしまうのだろうか。ウイトゲンシュタインは、こういった「生の問題（das Lebensproblem; das Problem des Lebens）」（TLP, 6.52; 6.521）を無意味なも

のとして破棄してしまおう、と言っているのではない。本稿の冒頭でも紹介したように、ワイトゲンシュタインにとって宗教は、重大な関心事だった。ワイトゲンシュタインが問題視しているのは、あくまでもこういった価値の問題について語ることなのである。

とは言え、価値の問題について一切語らないというのは、あまりに消極的・禁欲的な態度ではある。しかしワイトゲンシュタインは、次のようにも言っている。

だがもちろん、言い表しえぬもの（das Unaussprechliche）は、存在する。それは、示される（sich zeigen）。それは、神秘（das Mystische）である。（TLP, 6.522）

すなわち、語りえないものについて語ることはできなくても示すことはできる、と言うのである。しかし、ここで言われている「示す」とは、一体どういうことなのか。「示す」と「語る」とは、どう違うのか。

この点についてはⅢで詳しく検討するが、さしあたってここでは、『論考』の要求を忠実に実践していると思われる事例として、『論考』自身に即して考えてみよう。そうすると、『論考』は「語りえないものがある」と語ることによって（つまり「言語には限界がある」と語ることによって）語りえないものを示している、とは考えられないだろうか。すなわち『論考』は、語りえないものについて、言語の限界を超えたところで語ろうとするのではなく、言語の限界内で示しているのである。したがって、『論考』からワイトゲンシュタインの宗教思想を読み取るという本稿の課題は、『論考』で語られずに示されているものに眼を向けることだと言える。

（2）世界の構造

上から、『論考』の課題が言語の論理を正しく理解することであることの原因が、明確になっただろう。この課題は、言語と世界との関係を解明すること、

と換言することができる。ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

世界は、実情 (der Fall) であることがらのすべてである。(TLP, 1)

世界は、事実 (die Tatsache) の総体 (die Gesamtheit) であり、もの (das Ding) の総体ではない。(TLP, 1.1)

実情であることがら、すなわち事実とは、諸事態 (der Sachverhalt) の成立 (das Bestehen) である。(TLP, 2)

事態とは、諸対象 (das Gegenstand) (事物 [die Sache], もの) の結合 (die Verbindung) である。(TLP, 2.01)

対象は、単純である。(TLP, 2.02)

まず世界は、物体の総体ではなく、事実の総体である。そして事実は、事態の成立である。事態とは可能的な事実のことであり、成立とは可能性から現実性への移行である。つまり、成立しうるさまざまな可能的な事実が事態であり、そのうち現実に成立している事態が事実なのである。したがって世界は、成立している事態 (= 事実) の総体であり、事態 (= 可能的な事実) のすべてが世界を構成しているわけではない。さらに事態は、さまざまな対象の結合である。対象とは、さまざまな事態の構成要素となる物体である。このとき対象は、それ以上は分析されない単純なものである。

たとえば、ある犬が物体としてあるとしよう。このとき、「ポチが餌を食べていること」が、事実である。しかしその犬には、「ポチが餌を食べること」の他にも、「ポチが犬小屋で寝ること」、「ポチがボールで遊ぶこと」など、さまざまな可能性があった。これら可能的な事実が、すべて事態である。そして、これらのうち「ポチが餌を食べること」という事態が現実に成立し、それが事実となったのである。これらの事態は、犬、餌、犬小屋、ボールなどの物体に分解できる。こうした物体が対象であり、その対象の組み合わせの変化によって新たな可能性が開かれ、可能性としての事態が構成されるのである。

このように世界は、世界—事実—事態—対象という構造をなしている。こ

の構造についてワイトゲンシュタインは、さらに次のように説明している。

対象は、不変なもの、存立するもの（das Bestehende）である。〔対象の〕配列（die Konfiguration）は、変化するもの、不安定なもの（das Unbeständige）である。（TLP, 2.0271）

諸対象が事態において連関する（zusammenhängen）ような仕方が、事態の構造（die Struktur）である。（TLP, 2.032）

事実の構造は、諸事態の構造からなる。（TLP, 2.034）

成立している事態の総体が、世界である。（TLP, 2.04）

成立している事態の総体はまた、どの事態が成立していないかをも規定する。（TLP, 2.05）

諸事態の成立と非成立とが、現実（die Wirklichkeit）である。（TLP, 2.06）

対象自体は変化しないが、対象の配列は変化する。配列の変化によって他の対象との連関の仕方も変化し、そうして事態を構成する。これが、事態の構造である。そして、この事態の構造によって、事実の構造も決定される。ただし事態には、先述のように、成立している事態と成立していない事態とがある。事実とは成立している事態であり、成立している事態（＝事実）の総体が世界である。そして、成立している事態の総体（＝世界）と成立していない事態とを合わせたものが、現実である。ワイトゲンシュタインは、世界の構造をこのように考えた。

（3）言語と世界

ワイトゲンシュタインは、世界と同様に言語にも構造がある、と考えている。この言語の構造こそが、言語の論理であり、言語の本質である。したがって、「言語の論理を正しく理解する」とは、言語の構造を解明することに他ならない。ワイトゲンシュタインは、次のように言っている。

命題の総体が、言語である。（TLP, 4.001）

要素命題 (der Elementarsatz) は、名 (der Name) からなる。それは、名の連関 (der Zusammenhang), 名の連鎖 (die Verkettung) である。(TLP, 4.22)

命題は、要素命題の真理関数 (die Wahrheitsfunktion) である。(TLP, 5)

言語は命題の総体であり、命題は要素命題からなり、要素命題は名からなる。すなわち言語は、言語—命題—要素命題—名という構造をなしている。そして、この言語の構造は、先に見た世界の構造に対応している。ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

事実の論理像 (das logische Bild) が、思考である。(TLP, 3)

思考は、命題において、感性的に知覚可能な形で表される。(TLP, 3.1)

名は、対象を意味する。対象が、名の意味である。(TLP, 3.203)

名は、命題において、対象の代わりをする。(TLP, 3.22)

真なる命題の総体が、自然科学全体 (あるいは自然諸科学の総体) である。(TLP, 4.11)

要素命題が真ならば、その事態は成立している。要素命題が偽ならば、その事態は成立していない。(TLP, 4.25)

命題の総体である言語は、自然科学の全体、すなわち事実の総体としての世界に対応している。命題は、文字や音声などで表現された、事実の「論理像」である。要素命題は事態に対応しており、名は対象を意味している。すなわち、言語—世界、命題—事実、要素命題—事態、名—対象という具合に、言語の構造と世界の構造とが各段階でそれぞれ対応しているのである。

言語と世界とは、言語が世界の像であることによって、対応している。名の配列は、対象の配列を論理的に写していて、対象の配列の写像 (die Abbildung) となっている。そして、それらの名によって構成された要素命題は、対象で構成された事態を表わしている。この「写像関係 (die abbildende

Beziehung)」（TLP, 2.1514）によって、要素命題からなる命題は、事実の意味を表すことができるのである。

このような写像理論によって、言語と世界とがどのように関係しているか、また言語が正しく使用されるときどのような意味が与えられるかが説明される。言語と世界との関係が写像関係にあるということが、言語の構造であり、また言語の本質である。『論考』において「言語の理論を正しく理解する」という課題は「言語と世界との関係を解明すること」によってなされた、と言ってよいだろう。

II 事実と価値

前節で見たように、「真なる命題の総体が、自然科学全体である」（TLP, 4.11）のだが、ウィトゲンシュタインは「自然科学の命題以外は何も語らぬこと」（TLP, 6.53）とも言っていた。つまりウィトゲンシュタインは、事実に関する言説のみが可能なのだ、と言っているのだろう。すなわち、事実の領域における問題については語るができるが、そこからさらに踏み込んで価値の問題についてまで語ることはできないのだ、と。

それでは、価値の問題に対して、我々はどのような態度をとることができるのだろうか。言うまでもなく、本稿の主題である宗教は、価値の問題である。そこで本節では、ウィトゲンシュタインにおける事実と価値との差異について、見ていくことにしたい。

（1）哲学の問題

ここに、いくつかの記号からなる集合があるとしよう。もし、その集合が命題の体をなしていなければ、その記号の集合について真偽判定をすることはできない。それは、真でもなければ偽でもない、そもそも何も語っていない、「無意義〔ナンセンス〕(unsinnig)」（TLP, 4.003）なのだ、ということになる。このとき、その記号の集合は、世界と対応しておらず、世界の写像になって

いない。ウィトゲンシュタインは、多くの哲学的命題もこの類のものだと考えている (vgl., TLP, 4.003)。

このように言語の限界は、言語と世界との写像関係において説明される。つまり、言語と世界とが写像関係にあって初めて言語表現は意義を持つのであり、世界の写像になっていない言語は何の意義も持たない。こうしてウィトゲンシュタインは、これまでの哲学の問題を解消しようとしたのである。

ここで、ウィトゲンシュタインが哲学について論じている箇所を見てみよう。ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

哲学は、自然諸科学の一つではない。(TLP, 4.111)

哲学の目的は、思考の論理的な明晰化である。／哲学は、学説ではなく活動である。／哲学の仕事は、本質的に解明 (die Erläuterung) からなる。／哲学の成果は、「哲学的諸命題」ではなく、諸命題の明確化である。／哲学は、そのままではいわば不透明でぼやけている思考を明晰にし、はっきりと境界づけねばならない。(TLP, 4.112)

すなわち、ウィトゲンシュタインにとって哲学とは、言語や思考を明晰にするための解明である。もちろん、『論考』が行おうとしていることも、言語の解明である。

哲学は、思考可能なものを境界づけ (abgrenzen), そしてそれによって思考不可能なものを境界づけねばならない。／哲学は、思考可能なものを通して、内側から思考不可能なものを限界づけ (begrenzen) ねばならない。(TLP, 4.114)

哲学は、語りうるものを明晰に描写することによって、語りえぬものを意味する (bedeuten) だろう。(TLP, 4.115)

すなわち『論考』は、言語の限界を解明することによって、語りうるもの

を明確にしようとしているのである。それは、言語の限界を超えたところや世界の外側からではなく、あくまでも言語の限界内、世界の内側において明確にする作業である。それによって、語りえないものを意味するのである。ここで「語りえないものを意味する」とは、先に述べたように、語りえないものが示されるということである。語りえないものについて、それが語りえないものなのだと明確化することによって、語りえないものを示すのである。

(2) 価値の問題

上では哲学の問題について見たが、これは哲学だけではなく倫理・宗教・芸術といった価値の問題、生の問題についても、同じことが言えるだろう。価値の問題も、言語の限界を超えた問題、世界の外側の問題だからである。したがって、これらの問題についても、語ることはできない。もし、語ろうとしても、それは哲学と同様、何も語っていない記号の集合になってしまうだろう。

ウイトゲンシュタインは言う。

それゆえ倫理学 (die Ethik) の命題も、存在しえない。／命題は、〔倫理という〕より高いもの (das Höheres) を表現しえない。(TLP, 6.42)

倫理 (die Ethik) が言い表しえぬものであることは、明らかである。／倫理は、超越論的 (transzendental) である。／(倫理と美とは、一つである。)(TLP, 6.421)

ウイトゲンシュタインにとって価値の問題は、倫理を「より高いもの」と呼んでいるように、重要な問題である。したがって、これらについては言語の限界内で、世界の内側から明確にすることによって、示さなければならない。これが『論考』が目指したことであり、『論考』は語らないことによって、沈黙の内にそれを示そうとしているのである。

それでは、『論考』は何を示そうとしているのか。また、そもそも「示す」

とはどういうことなのか。ウィトゲンシュタインは言う。

命題は、論理形式 (die logische Form) を描写できない。論理形式は、命題の中に反映されている。／言語の中に反映されていることを、言語は描写できない。／言語の中で自らを表現することを、我々が言語で表現することはできない。／命題は、現実の論理形式を示す。／命題は、論理形式を提示する。(TLP, 4.121)

命題は、それ自身によって論理形式を示している。しかし、命題が命題によって論理形式を表現することはできない。言語については言語によって語ることはできず、ただ言語において示されるだけである。これまで見てきた言語の構造、世界の構造、言語と世界との関係なども、『論考』において示されているのである。前節での引用を再掲しよう。

だがもちろん、言い表しえぬものは、存在する。それは、示される。それは、神秘である。(TLP, 6.522)

倫理や宗教といった価値の問題も、語りえないものである。言語の限界を超えており、世界との対応を持たないからである。しかし価値は、示される。

先に見たように、自然科学は、事実の像である命題の総体であり、世界について語りうる。しかし、価値の問題については語りえない。したがって、命題すなわち言語でもって価値の問題について語ることはできない。こうして見ると、ウィトゲンシュタインが事実と価値とを明確に区別していることが分かる。つまり、自然科学で語りうる世界と自然科学で語りえない価値とを峻別し、価値を世界から超越しているものとして位置づけているのである。

それでは、価値が「示される」とは、具体的にどういうことなのか。ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

もし、善き意図 (das Wollen) あるいは悪しき意図が世界を変化させるならば、変えうるのはただ世界の限界 (die Grenze) だけであり、事実すなわち言語で表現されうるものを変化させることはできない。／つまり世界は、全体として別の世界へと変化するのでなければならない。いわば世界全体が、弱まるかもしくは強まるかしなければならない。／幸福な人の世界は、不幸な人の世界とは別物である。(TLP, 6.43)

善い意図や悪い意図は、世界がどのようにあるのかという事実を変化させるのではなく、世界の限界を変化させる。つまり、ある意図を持つ者に世界が全体としてどのように見えているのか、に影響を与える。と言うのも、善い意図を持つ者と悪い意図を持つ者とは、見える世界がまったく違うからである。

ウイトゲンシュタインは言う。

……〔前略〕……しかし、倫理が通常の意味での賞罰と無関係であることは、明らかである。……〔中略〕……たしかに、ある種の倫理的な賞罰はあらねばならないが、それは行為それ自身の中にあるのでなければならない。／(そして、賞が快であり罰が不快であらねばならないことも、また明らかである) (TLP, 6.422)

つまり、善い行為はその者を幸福にし、悪い行為はその者を不幸にする、と言うのである。それは、意図の中に賞罰が含まれているからである。ただし、ここで言う「賞罰」とは、倫理的な賞罰であり、実際の賞罰のことではない。これは、ウイトゲンシュタインの倫理思想の一端を示していると思われる。それは、価値の問題は全体としての世界に関係し、世界の内側の事実には関係しない、という思想である。また、善い意図は善い行為をする者を幸福にする、それは行為自体に含まれている、という思想である。

(3) 宗教の問題

それでは、ここからさらに進んで、ウイトゲンシュタインの宗教思想を見定めていくことにしよう。ウイトゲンシュタインは、次のように言っている。

同様に、死によっても世界は変化せず、終わるのである。(TLP, 6.431)
死は、生の出来事ではない。死は、経験されない。／……[中略]……／我々の視野が限界を欠くように、我々の生もまた終わりを欠いている。(TLP, 6.4311)

すなわち、死は生の中の出来事ではなく、したがって死を経験することはできない。またウイトゲンシュタインは、神について次のように言っている。

世界がいかにあるかなど、より高いものにとっては、まったくどうでもよいことである。神は、世界の内に姿を現しはしない。(TLP, 6.432)
神秘とは、世界がいかにあるかではなく、世界があるというそのことである。(TLP, 6.44)

永遠の相の下での世界の直観 (die Anschauung) が、——限界づけられた——全体としての世界の直観に他ならない。／限界づけられた全体という世界の感情が、神秘である。(TLP, 6.45)

ウイトゲンシュタインにおいて神は、価値の問題と同様、世界の内側ではなく全体としての世界に関係することとして考えられている。その意味で神は、価値の根源あるいは価値そのものとして捉えられていると言ってよいだろう。したがって、宗教の問題は世界の外側であって、それについては何も語りえないことになる。しかし重要なのは、語りえないということではなく、なぜ語りえないのか、また語りえないことによって何が示されているのか、だろう。

Ⅲ 世界の外側

(1) 信仰と啓示

ウイトゲンシュタインは、語りうるものと語りえないものとを峻別することを通して、語りえないものの深遠に触れていったのだと考えられる。語りえないものがあるということは、言語に限界があることを意味している。言語と世界とが対応しているように、語りうるものと語りえないものとは、世界の内側と外側という二重構造に対応している。ウイトゲンシュタインが「私の言語の限界が、私の世界の限界を意味する」(TLP, 5.6)と言っているように、言語の限界によって思考が限界づけられ、思考されている世界が世界の限界なのである。

ウイトゲンシュタインは言う。

論理は、世界を満たす。世界の限界は、論理の限界でもある。／それゆえ我々は、論理の内側で、世界にはこれらは存在するが、あれは存在しない、などと語ることはできない。／というのも、一見このことは、いくつかの可能性が排除されるようにも思われる。しかし、このような可能性の排除は、世界の实情ではありえない。もし、そうだとすれば、論理は世界の限界を超えていなければならないからである。すなわち、そのようになるのは、論理が世界の限界を他の側〔外側〕からも考察しうるときなのである。／我々が思考しえぬことを、我々は思考することはできない。したがって、我々が思考しえぬことを、我々は語ることもできない。(TLP, 5.61)

また、次のようにも言っている。

この見解が、独我論 (der Solipsismus) はどの程度正しいのか、という問いに答える鍵となる。／すなわち、独我論の言わんとするところは、まっ

たく正しい。ただ、それは語られえず、示されているのである。／世界が私の世界であることは、この言語（私が理解する唯一の言語）の限界が私の世界の限界を意味することに、示されている。(TLP, 5.62)

独我論を論ずることは本稿の趣旨から外れるが、独我論に一面の真理があることは確かだろう⁸⁾。ウイトゲンシュタインにおける、「私は、私の世界である。(ミクロコスモス。)」(TLP, 5.63)という世界の限界は、言語の限界によるものである。こうして、世界の内側と外側という世界の二重構造は、「私」という世界の内側と「私」という世界を超えそれを包括する世界との、二重構造だということが分かる。この二重構造は言語に限界づけられており、語りえないものはその限界の彼方に存する。そしてそれこそが、ウイトゲンシュタインにとっての神なのである。

ウイトゲンシュタインは、1916年7月8日の草稿で次のように言っている。

神を信じるとは、生の意義に関わる問いを理解することである。／神を信じるとは、世界の事実においてすべて説明されるわけではないことを知ることである。／神を信じるとは、生が意義を持つことを知ることである。(TB, S. 168.)

つまり、生の意義は世界の外側にあり、それは信じるしかないものである。それをウイトゲンシュタインは、神を信じることだと言っている。たしかに、世界の内側にあっても、生の意義を問うことはできるだろう。しかし、それについて語る言葉は何もない。このとき、生の意義に関わる問いがその種の問いであること、それは世界の内側で片づくような問題ではないこと、しかしそれでも生は意義を持つこと、これらを知ることがウイトゲンシュタイン

8) ウイトゲンシュタインは一種の独我論を採っており、ウイトゲンシュタインが言う「私」とはウイトゲンシュタイン自身を指している。したがって、ウイトゲンシュタインの宗教思想は、ウイトゲンシュタイン自身の生の問題だったと言える。

における信仰なのである。

ここまで繰り返し述べてきたように、ウイトゲンシュタインは、世界の内側と外側とを厳密に区別していた。それゆえ、ウイトゲンシュタインは世界を内側と外側とに切断してしまっているかのように見える。しかし、ここで分かるのは、ウイトゲンシュタインが世界の内側と外側との間の真のつながりを探り当てようとしていたことである。ただしそれは、世界を内側と外側とに切り分けないことには始まらない。そしてその過程で、多くの語りが、騙りとして排除された。その上で神と人間との関係を明らかにすることこそ、ウイトゲンシュタインの真の課題だったのである。ウイトゲンシュタインの眼は、峻別された世界の内側と外側との関係に向けられている。そして、それが信仰なのである。

言うまでもなく、ウイトゲンシュタイン自身にとっての信仰とはキリスト教信仰であり、ウイトゲンシュタインにとっての神はキリスト教の神である。しかし、ウイトゲンシュタインに従うならば、キリスト教（を含むあらゆる宗教）は語りえないものを語ろうとしている、ということにはならないだろうか。これは、神の啓示を前提とするキリスト教にあっては、神学の可能性を否定することにもつながりかねない。啓示は人間の思考の限界を超えたものであり、したがって啓示は存在しえないということになる。「神は、世界の内に姿を現しはしない」（TLP, 6.432）という命題は、神もまた沈黙しているということの意味しているのだろうか。

ウイトゲンシュタインは言う。

かつて、こう語られた。神は、すべてを創造しうる。ただ、論理法則に反することを除いては、と。——つまり、「非論理的」な世界について、それがどのようなものであるかを、我々は語りえないのである。（TLP, 3.031）

また、別の箇所では、次のようにも言っている。

神がある命題を真である世界を創造するならば、同時に神はまたその命題から帰結するすべての命題が真となる世界をも創造するのである。同様に、命題「p」が真となる世界を創造しておきながら、命題「p」に関わる対象の全体を創造しないなどということも、ありえない。(TLP, 5.123)

ウィトゲンシュタインにとって世界は、常に論理的である。ウィトゲンシュタインにとって神は、世界の原因ではあるが、あくまでも世界の外側の存在である。人間は、神によって創造された結果(=世界)については思考できるが、その原因にまでは思考が及ばない。ウィトゲンシュタインは言う。

世界の意義は、世界の外になければならない。世界の内では、すべてはあるようにあり、すべては起こるように起こる。世界の内には、価値は存在しない。——そして、仮に存在したとしても、それは少しも価値を持たない。(TLP, 6.41)

(2) 沈黙の宗教

ウィトゲンシュタインが無神論者ではないことは明白だとしても、ウィトゲンシュタインの哲学をキリスト教との関係でどのように理解したらよいのだろうか。そこで、キルケゴール⁹⁾の所論を手がかりに、ウィトゲンシュタ

9) 本稿でキルケゴールの著作は、次のテキストを使用した。引用にあたっては、略号と巻数の後に、SV3については頁数を、Pap.については整理番号をそれぞれ示した。

SV3: *Søren Kierkegaards Samlede Værker*, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, København, 1962-1964.

Pap.: *Søren Kierkegaards Papirer*, udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, 2. udg. ved Niels Thulstrup, København, 1968-1978.

なお訳出にあたっては、次の訳書を参照した。 ↗

インの哲学を宗教思想として解釈していきたい。

ここで、多くのキリスト教思想家の中でも特にキルケゴールに注目するのは、次のような理由からである。後述のようにキルケゴールは、自らの思想の伝達形式に非常に気を遣った思想家である。ウイトゲンシュタインの哲学においても、「語る」と「示す」という表現形式が問題になっていた。この限りにおいて、二人が問うていた問題は同じである。伝達形式・表現形式に対する強い問題意識が、二人を呼び集める。キルケゴールの伝達理論をも含めた宗教思想を補助線にすることで、ウイトゲンシュタインにおける表現形式の問題を起点に、その哲学を宗教思想として理解する手がかりが得られるだろう¹⁰⁾。

まず、ウイトゲンシュタインの神理解について、さらに考察を進めたい。ウイトゲンシュタインの世界理解において、神はいかなる存在なのか。ここで、キルケゴールの自然理解を参照してみよう¹¹⁾。キルケゴールは、一時期自然科学に熱中していたが、次第に自然科学批判を強めていく。キルケゴールは、次のように言っている。

-
- ↘ *Sören Kierkegaards Gesammelte Werke*, E. Hirsch und H. Gerdes, hrsg., Eugen Diederichs Verlag, Dusserdorf und Köln, 1950ff.
『キルケゴール全集』筑摩書房, 1962~1975年。
『キルケゴール著作集』白水社, 1963~1968年。
『キルケゴール著作全集』創言社, 1988~2011年。
『キルケゴール講話・遺稿集』理想社, 1964~1983年。

10) それゆえ、本稿の冒頭でも述べたように、ここではウイトゲンシュタインがキルケゴールからどのような影響を受けたのかについては取り上げない。また、ウイトゲンシュタインとキルケゴールとの共通点・類似点あるいは相違点を探ることも、第一義の目的とはしない。

11) 以下のキルケゴールの自然理解については、拙稿「キルケゴールにおける自然的教育学的考察」(キルケゴール協会『新キルケゴール研究』第5号, 2007年3月, 21~39頁所収)を参照のこと。

このような科学が精神の領域へと踏みこもうとすると、危険であり破壊となる。それらには、それなりの仕方で植物・動物・星を扱わせるのがよい。しかし、人間精神をその仕方で扱うことは、倫理的なものや宗教的なものの情熱を弱めるだけの冒瀆である。(Pap., VII¹, A182.)

こうしたキルケゴールの自然科学批判の根底には、科学の領域と精神の領域との峻別がある。キルケゴールによると精神の領域には、科学による量的・客観的な認識とは異なる、質的で主体的な認識が必要である。自然科学と倫理的なものとは、「まったく異質なもの」(Pap., VII¹, A183.)なのである。もっとも人間は、精神であると同時に自然の一部でもある。そうすると、人間をそのような総合たらしめた神の位置づけが問題になる¹²⁾。それは、キルケゴールの自然理解に基づくと、自然に顕現する神である。

ウイトゲンシュタインは、事実と価値との峻別を求めていた。これは、科学の領域と精神の領域との峻別を求めたキルケゴールの主張と重なる。キルケゴールの自然理解を手がかりにウイトゲンシュタインの世界理解を解釈するならば、ウイトゲンシュタインが言う世界の内側に示される神とは、世界の中に顕現する神だと言うことができるだろう。ただし、ここで言う「顕現する」とは、文字通り姿を現すということではなく、示されるということである。

そうすると、やはり「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」(TLP, 7)という命題が問題になる。もとより、語りえないものについて語ることは、論理的・原理的に不可能である。しかし、Iで見たようにウイトゲンシュタインは、語りえなくとも「示される」(TLP, 6.522)と言っていた。示されうるが語りえないものとは、とりわけ宗教的な文脈において、いかなるものなのだろうか。

12) キルケゴールにおける総合としての自己という思想については、拙論「キルケゴールにおける教育関係の原理と構造」(東北大学大学院教育学研究科『研究年報』第50集, 2002年3月, 15~30頁所収)を参照のこと。

ここで、キルケゴールの『おそれとおののき (*Frygt og Bæven*)』(1843年)における「イサクの燔祭」の議論を見てみよう。「イサクの燔祭」とは、『旧約聖書』の「創世記」22章1節～19節にある、アブラハムと息子イサクについての逸話である。それによるとアブラハムは、神から「一人息子イサクを犠牲として捧げるべし」という要求を受け、イサクを神に捧げることを決意する。ところが、アブラハムがイサクの上に刃物を振り上げた瞬間、神はその行為を制止した。

このようなアブラハムの行為は、言うまでもなく倫理的には許されない行為(=殺人)である。しかし宗教的には、神に対する絶対的な服従でもある。キルケゴールは、アブラハムは有限的なもの(=イサク)を断念するが、背理的なもの(神)の力によって信じ、一度は断念したはずの有限的なものを再び手に入れた、と言っている(cf., SV3, 5, S. 35.)。これをキルケゴールは、「倫理的なものの目的論的停止」(SV3, 5, S. 51.)と呼んでいる。

ここでキルケゴールの関心は、倫理的なものと宗教的なものとの間における葛藤に向けられている。端的に言えば、それは信仰の問題である。しかしこの葛藤は、語りたいたいのものが語りえないものであるという葛藤、と解釈することもできるだろう。「倫理的なものの目的論的停止」は、それが語りえないものであり沈黙する他ないこと、そして理性では到底理解しえない宗教的なものであることを示している。実際、「イサクの燔祭」については、倫理学や宗教学においても、賛否を含めてさまざまな解釈がある。それは、この問題がそもそも示されるしかなかったものであること、つまり語りえないものであることを示しているのではないか。

神の要求の前でアブラハムは、語る言葉を持たず、葛藤の中でただ沈黙するしかなかった。「イサクの燔祭」は、アブラハムの沈黙を通して、語りえないものを示している。いわば語りえないものとは、アブラハムの沈黙のような状況なのである。そしてその状況は、ただ示されるのみである。こうして「イサクの燔祭」からは、「示されるもの」とはひとつの状況であることが分かる。

ここで、語ることと示すこととの関係をさらに明確にするため、キルケゴール

ルの著作形式に触れておきたい。周知のようにキルケゴールは、仮名で多くの著作を残した。キルケゴールは、仮名著作においてさまざまな人生観(実存)を提示してみせて、宗教的生へと間接的に導き入れようとしたのである。このようなキルケゴールの伝達方法は、間接伝達と呼ばれている。その一方でキルケゴールは、建德的講話に代表される実名著作も多く残している。これは、直接伝達を担っている著作群である。

キルケゴールは、宗教的知識(教義)は実名著作によって直接伝達し、宗教的実存(生き方)は仮名著作によって間接伝達しようとしている。そして、これら二つの著作群が対応し合い、著作全体が弁証法的な構造を有している。もちろん、個々の著作はそれぞれの著者が語っているのだが、キルケゴールは著作の全体構造においてキリスト教的真理を示そうとしている。つまりキルケゴールは、実名著作と仮名著作との二重構造においてキリスト教的真理を示そうとしているのである¹³⁾。

したがってキルケゴールの著作形式は、実存伝達(キルケゴールにあっては究極的には宗教的伝達)は示すことによってしかなされない、ということを表している。そうすると、ワイトゲンシュタインが言う「示すこと」とは、間接的に「語ること」だと言えるだろう。「示すこと」は、語りと語りとの間の語っていないところ、つまり沈黙の状況においてなされる。その意味でワイトゲンシュタインの宗教は、「沈黙の宗教」と呼ぶことができるだろう。

13) もっとも、実際にキルケゴールが実名著作で語っているものがワイトゲンシュタインの言う「語られうるもの」の範囲に収まっているかどうかは、別途、検討する必要がある。それも含めて、キルケゴールの伝達理論の構造をワイトゲンシュタインの観点から解明することは、キルケゴールの思想を研究する上では有意義だと思われる。ただし本稿の主眼は、あくまでもワイトゲンシュタインの哲学にあるので、ここでは深く立ち入らない。

おわりに

本稿では触れてこなかったが、『論考』の大部分は論理学の議論に割かれている。『論考』が宗教について触れている箇所は、命題6番台を中心にごく僅かである。しかし、これまでの議論から明らかなように、それをもって『論考』は宗教に関心がないと考えるのは早計であろう。多くの語り（『論考』にあつては命題）の間に潜んでいる沈黙の中にこそ、『論考』の真の主題は示されている。

ウィトゲンシュタインは、最後の命題で「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」(TLP, 7)と言っていた。ここで、「語りえぬものについては、沈黙するしかない」、あるいは「語りえぬものについては、語ることはできない」などとは言われず、「沈黙せねばならない〔傍点引用者〕」と言われていることは注目し値する。これは、ウィトゲンシュタイン自身に向けた禁止だったのではないか¹⁴⁾。それは、『論考』の真の主題が語りえないものであったことを示唆している。ウィトゲンシュタインの関心は宗教にあり、『論考』の真の主題もまた宗教であった。だからこそ、語らないよう自らを律する必要があったのである。

こうして見ると、ウィトゲンシュタインの哲学は、宗教思想そのものである。ただし、神がどのようなものであるかなどについては、『論考』は沈黙を守っている。しかしこの沈黙は、世界の外側にいる神と世界の内側にいる「私」とをつなぐ信仰を示す、ひとつの状況である。ウィトゲンシュタインは、言語（思考）と世界の限界の彼岸に、「私」の神を見出ししていたのである。

最後に、今後の課題と展望とを簡単にまとめておこう。ウィトゲンシュタインの哲学は、ウィトゲンシュタイン自身が強調しているように、前期から

14) 星川も、同様の見解である（『宗教と〈他〉なるもの言語とリアリティめぐり考察』春秋社、2011年、134～137頁を参照のこと）。

後期にかけて大きな思想的転回を遂げたと言われている。しかし、前期哲学と後期哲学との間には、連続性を認めることもできる。それは、哲学の問題は言語の論理を正しく理解すれば解決できる、という確信である。つまり、ウィトゲンシュタインの基本的な発想は、根本においては変化していないのである。したがって、前期哲学から後期哲学への変化は、ウィトゲンシュタインの哲学の転回というよりも展開として理解するべきものだろう。

その点で本稿は、前期哲学に限定した考察ではあったが、後期哲学にも通じるウィトゲンシュタインの宗教思想の根本を明らかにしていると思う。そこで今後の課題としては、後期ウィトゲンシュタインにおいて宗教の問題がどのように展開していったのか、その行方を見定めることが挙げられる。その際は、中期の『青色本 (*Das Blaue Buch*)』(1933年)や後期の主著『哲学探究 (*Philosophische Untersuchungen*)』(1953年)、1930年代の日記の分析を通して、ウィトゲンシュタインの宗教思想の真相に迫りたい。

A Study of the Limit in the Religious Thought of L. Wittgenstein

Kiyoshi ITO

The purpose of this paper is to examine and elucidate the distinctive features of the religious aspects of Ludwig Wittgenstein's philosophical thought. Few people generally regard Wittgenstein as a religious thinker, but research has been carried out on his views on religion and attempts have been made to apply his philosophical thought to theology. Wittgenstein's philosophical thinking is commonly divided into two phases – the early phase and the later phase – and even as it showed a certain consistency, it also underwent considerable transformation. Accordingly, in the early and later phases of Wittgenstein's philosophy there are both elements that are the same and elements that are markedly different. In this paper I will look at the early phase of Wittgenstein's philosophical thought, picking out certain ideas about religion that run throughout Wittgenstein's philosophy and elucidating the distinctive features of such ideas.

Wittgenstein held that language has limits, and that accordingly there are also limits to thought. Further, he held that since language and the world exist with and through one another, the world also has limits. Accordingly, it is impossible to speak anything regarding what exists beyond the limits of language, and impossible to speak anything that lies outside the world. This means that though it is possible to speak of things when they have to do with *facts*, it is not possible to speak of things when they have to do with

values – since values lie outside the world. Thus, it is not possible to speak things like religion, faith, revelations, and God (they are ‘unspeakable’). Nevertheless, Wittgenstein argues, even though it is not possible to ‘speak’ these things, it is still possible to ‘show’ them. According to Kierkegaard, ‘showing’ is a particular state of affairs, and to ‘show’ is a way of indirectly ‘speaking’ something. We might perhaps call this showing a ‘religion of silence.’ Wittgenstein was a philosopher who worked out a religion of silence, a religion that exists on the other side of the limits of language, thought, and the world.